

パリとロンドンの印象

横浜市立大学教授 小山路 男

73年11月3日から2週間あまり、パリとロンドンへ出張してきた。何分短い期間のことなので、それこそパリみたいな見当ちがいがあるかも知れないが、取りとめのない印象を書いて責をふさぐことにしたい。

私は71年10月から11月にかけて、やはりパリとロンドンを訪れているので、今回は2回目である。そうして2回目ということが心に余裕をあたえてくれたし、前回のとき以後の動きをフォローする意味では大変に有意義であった。調査研究の内容については別の機会にゆずって、社会保障こぼれ話のようなものを書くことにしよう。

I

パリもひどいクルマ社会で、ラッシュ時のエトワール広場はクルマで埋ってしまふ。よくあれで事故が起らないものだと思われるほど、各自が勝手に広い広場をグルグルまわっては、それぞれの大通りに分れて行く。ところが、あれでも一定の秩序とかリズムがあるのだそうである。ゴチャゴチャと車がぶつかりそうに走ってはいても、ある暗黙のルールを守っているかぎり、事故は起らないという。個人主義のかたまりみたいなフランス人が、勝手に自己を主張しているようにはみえても、社会的秩序が保たれているのも、エトワール広場の場合と同じなのであろう。

フランスの社会保障は家族手当がすぐれているのは周知の通りであるが、年金や医療保険は赤字である。そこで家族手当のほうから年金と保険に資金を融通している。というのは家族手当だけが黒字なので、制度間の財政調整をしているわ

けである。

保険の赤字は深刻な問題なのだが、面白いのは診療報酬の決定方法である。フランスの診療報酬は毎年5~7%改正されているが、これは資本家と労働者の代表と診療担当側が交渉してきめる。公益代表はいないのかと聞いたら、いないという。議長には誰がなるのかと重ねてきくと、支払側と診療側が交代してやるという。なるほど、交代でやればお互いに無茶なことは言わないのかも知れない。このあたりは大人のやり方だと感心した。

医療保険の赤字対策は頭の痛い問題だが、このためにアルコール税を目的税として徴税することを考えている。医療保険の大きな赤字の原因はアルコール中毒なので、酒に税金をかけて保険財政に入れようというのである。最初は冗談だと思って聞いていたら、まじめな話だった。なるほどフランス人もよく飲む。中食も夕食も、それぞれ2時間以上もかけてゆっくり、一杯やりながら、会話を楽しんでいる。酔っぱらい運転の取締りも、泥酔を除いてはやっていないらしい。だから、午後のランデブに出かけると、先方も赤い顔をしている。当方はもちろん「郷に入れば郷に従う」ために、中食でもワインをやっている。最初は気になったが、そのうち当たり前になってしまった。

それにしても、あの調子では連中はいつ働くのであろうか。パンとコーヒーだけの朝食では、午前中はエネルギーも出ないであろう。午後の仕事は、それこそ酒と酒の間のようなものである。アルコール中毒患者が多いのも、当然なのだろう。日本人が勤勉すぎるのか、フランス人がノンビリしているのか、考えさせられたことであった。

フランスの医療保険はいつまでもなく償還制なのであるが、71年11月までは、医師は好きだけ患者に診療代を要求していた。償還の基準は公定の料金表にもとづくから、被保険者に戻ってくるのはごく僅かというケースもまれではなかった。

そこで、前回私が行ったときには、新しい協定を結び、協定医は料金表以上を請求できないこととした。71年11月初旬は、この問題で政府と医師会がモメてい

る最中であつた。結局は政府の主張を医師たちが認めたのであるが、協定 (convention) に対する不満は根強いものがある。それは経済的理由というよりも、医の自由が政治権力に従属させられてしまったという怒りの感情であろう。もしこのようなことが実施されると、1日に30人もの患者がイギリスや西ドイツのように押しかけて満足な医療ができないという反対も強い。(わが国の医師が1日に診る患者数が平均63人、大都市などでは150人程度であることを思い出した。) そこでパリやマルセイユのような大都会では、医師会の推せんする医師については、協定外診療費を請求できるという例外を認めることにしている。こういう例外がふえると保険が骨抜きになりかねないので、当局も頭が痛いらしい。

II

イギリスは保健サービス方式だから、医療はすべて無料である。ところが、そういう病院でも私的診療が行なわれている。病床不足はイギリスでも同様で、生命にかかわるような病気でないと、なかなか入院できない。脱腸などは3年も待たされる、という話も聞いた。それに特定の医師の診療を受けたいと、患者が希望する場合もある。このような事情から、ヘルスサービス病院の全病床の約1%が私的病床として使われている。

病院に勤務している顧問医たちは、本人が希望すれば、私的病床を持って個人的に患者を取ることができる。入院料はベラボウに高く、ロンドンの教育病院などでは1日に2万5千円程度をホスピタル・フィーとして取られる。医師への礼金はどの位かと聞いたら、それは医師と患者できめることで、当方の関知したところではないという。役人のセリフはどこでも同じようなものだ。

面白いのは顧問医の給料のきめ方である。私的診療をやっている医師は、俸給の11分の9を受取る。11分の2はライセンス料のようなものである。どうして11分の2で10分の2ではないのかと聞くと、とにかくそうになっているというだけである。帰国後ある人は、それはギーニから来たのではないかと教えてくれたが、

そうかも知れない。私的病床は最近停滞気味で、ふえる傾向はないとのことであつたが、ともかく面白い。

このように、私的病床に入院すれば、費用も大変にかさむ。そこで、イギリスでは私保険が入院保険を売り出している。BUPA というのが大手で、人口の5%が私保険に加入しているが、そのうちの75%のシェアをもっている。その会社を訪ねて、話を聞いたり資料を貰ってきた。最近、わが国の生命保険も入院費特約を商品として売り出しているが、私保険との関係をどうみたらよいか、ロンドンでつくづく考えさせられた。

いま、イギリスでは例のタックス・クレジットが国会で議論されている。私の目的のひとつは、この資料の収集と事情調査であつた。この話もいずれ細かく報告したいが、内国歳入庁へ行ったときのことを書いてみよう。内国歳入庁はサマセット・ハウスにある。この古い建物に、1834年の救貧法委員たちが頑張っていたのかと、いささか感慨深かつた。ところが、である。大使館の人が注意してくれたのだが、ここの役人はオックスフォードやケンブリッジ出身のエリートで、英語がわかりにくい。オックス・ブリッジの連中は、話をしながら、相手をうまくからかったり、答えをはぐらかしたりすると、自分でハッと笑う。こちらが一緒になって笑うと、まったくこっけいなことになるから、呉々もご用心を、というのである。

仕方がないから、質問はすべて通訳してくれた人にまかせ、当方はメモばかり取っていた。終りにお礼の挨拶をしろというので、うまくもない英語で挨拶したら、何だ喋れるのかという顔をしていた。だいたい、外国へ調査に行ったら、必ず通訳を頼むべきだと思う。たとえその国の言葉ができて、通訳して貰っているうちに整理ができる。高い費用を払って行くのだから、不正確な情報を集めては何にもならない。ついでだが、あの子の人は、妙な笑い方をしなかつた。

■
前回は土地不案内もあり日程も詰っていたので、あまり見物ができなかった。けれどもパリのように、地下鉄と足で歩きまわったところでは、土地カンが実によく働いた。やはり観光バスなどでは駄目で、あやしげなフランス語を頼りに地図を見て歩いたところはちがうのである。

今度の出張で非常にうれしかったのは、パリでもロンドンでも郊外に行けたことである。パリからヴェルサイユを経て、バスカルがパンセを書いたというポール・ロワイヤルの廃墟へ行ったとき、ロンドンからハンプトン・コート、ウインザーへ行ったとき、いずれも11月には珍らしくよく晴れた日曜日であった。大都市をはなれて20~30分もドライブすれば、平坦な草原が広がっている。ゆたかな自然の中で、人びとはノンビリと暮している。何とも羨しいかぎりである。

残念だったのは、アン王女の結婚式の当日にロンドンを発ったため、パレードが見られなかったことである。ウエストミンスター寺院へ行って、ウエップ夫妻のお墓まいりをしたいと思っていたのも、結婚式の準備のため開放されていなかったのが駄目になった。ただロイヤル・フェスティバル・ホールでロンドンフィルが開けたのは、まことに幸いであった。

あわただしい旅ではあったが、それなりの収穫は十分にあったし、楽しい思い出も残った。今度のように楽な日程でも、私の貧弱な体力では少なからず負担であった。とくにパリが不調で、ロンドンでは回復した。どうもバイオリズムとかがあるらしく、4日程度の間隔で好不調がくりかえされる。国際会議などに出席する人たちも、ギリギリの日程で出かけるらしいが、余裕をゆっくり取らないとかえって能率が落ちるのではないか。私ももう若くないのだから、無理は絶対にしなかった。

帰ってきてみると、日本全体が石油危機で慌てふためいているのに驚いた。ほんの2週間程度の留守中に、この国では何が起ったのだろうか。日本というのは振幅の激しい国で、経済社会がこんなに激動していると、社会保障を伸ばすのも容易な仕事ではない。色々な感想もあるが、好きな調査で走りまわり、ゆっくり

休養もできたパリとロンドンの生活が夢のように思われてならない。

パリでもロンドンでも、たしかに物価は上っていた。フランもポンドも使いでなくなったし、EC諸国では普通であった付加価値税がイギリスでも実施され始めていた。この付加価値税はVATとって、取引高の10%がかけられる。だが、駐車場の料金までVTAこみいくらと表示してあるのだから、流通税といったほうが正しいのであろう。

おまけに、イギリスでは所得政策の第3ラウンドということで、労働者の不満もすでに大きかった。フランスもフランの価値維持では、苦しい立場に立っていた。ついでながら、帰途立ち寄ったハンブルグでは、石油危機のため、休日のアウトバーンのドライブは禁止され、スピード制限が行なわれるとさわいでいるときであった。

けれども、トイレット・ペーパーから始まり、洗剤不足にいたるモノ不足の恐慌感などはどこにもみられなかった。デマによる信用金庫の取りつけさわぎなど、まさに集団ヒステリーとしか考えられない。消費者ばかりか、財界も政府も、色を失なってあわてふためいている印象が強かった。

それと同じ時期のパリもロンドンも、苦しい問題はかかえながらも、平常通りのノンビリとした生活のテンポは崩していなかった。日本のように高度成長のはずみがついている経済社会では、石油不足で急ブレーキがかかると、それだけショックが大きいのであろう。短かい出張ではあったが、国情の差というものを痛感せざるをえなかったのである。